特集 読書のじかん

最近、読書してますか？　読書といえば「子育てにいい」、「こころを豊かにする」といったプラスのイメージを連想する方が多いはずです。今回、市内で読書の推進に携わる人や団体を取材し、改めてその重要性を認識するとともに、可能性について考えてみました。

山口公民館の放送室で朝読みをする
山口歩夢くんと梨里さん兄妹

File.01 29年続く朝読み活動

9月19日の早朝、午前6時40分、山口公民館内にある放送室で朝読みをする兄妹の姿がありました。山口歩夢（あゆむ）くん（桜山小6年）と梨里（りり）さん（同4年）です。

慣れた手つきで放送室にある機器のスイッチを入れ、マイクの前に座る梨里さん。持ってきた国語の教科書に載っている話を、すらすらと読み始めました。続いて兄の歩夢くんが社会の授業で学んだ日本国憲法についての文章を朗読しました。2人の声は、集落内の各家庭に備付けてあるラジオから流れます。

朝読みを終えた2人に話を聞くと、「聞いてくれる集落の人たちみんなに、気持ちが伝わるように読むことを心掛けています。あとで『上手だったね』と言ってもらえるのが嬉しいです」と口をそろえて話してくれました。

この朝読み活動が山口公民館で始まったのは、昭和58年のこと。以来29年間、途絶えることなく続けられています。現在は集落内の小学生13人がそれぞれ月に1回ずつ、当番制で行っています。

山口公民館

朝読みで高まる地域力

「子どもたちは学校から毎日音読をするようにと、カードを持ち帰ってきますが、家族に聞いてもらうだけでなく、集落のたくさんの方々に聞いてもらえる朝読みは、本を読むことの楽しさを実感できるいい機会になっていると思います」こう話すのは、山口子ども会会長の平山義孝さんです。また、「集落の人たちに子どもたちの元気な声を聞いてもらうことは、地域力の向上につながると考えています」と言います。

山口子ども会会長
平山義孝さん

以前はどの集落でも行われていた朝読み活動ですが、少子化が進み、実践しているところは少なくなりました。そんな中、今も続く山口子ども会の朝読み活動は、集落に活力を与えています。

File.02 ボランティアで広がる読書の輪

9月21日、火の神保育園で月1回行われている園児への読み聞かせ会がありました。読み聞かせをしたのは、市内のボランティアグループ「プータンの会」と「たんぽぽのわたげ」のメンバー4人です。

約1時間、園児らは目を輝かせながら話に耳を傾け、ときどき笑ったり、驚いたりしながら楽しんでいました。

本の楽しさを伝えたい

本市に読み聞かせボランティアグループ連絡会（久木田弘子会長）が発足したのは平成21年のこと。それまで各地域で活動していた7つのグループが連携して「子どもたちに本の楽しさを伝えていこう」と連絡会は設立されました。現在は主に保育・幼稚園や小・中学校での読み聞かせをはじめ、毎年1月に行われる市立図書館主催の「ふれあい図書館まつり」の運営協力などを行っています。

同会の久木田会長は「各グループのメンバー構成は、学校の保護者だったり、地域の有志だったりと年齢も職業もさまざまですが、『本の楽しさを伝えたい』という気持ちは一緒です。私たちの活動が、子どもたちへの『こころの教育』の一助になればと思っています」と話します。

家庭でも読み聞かせをしてほしいという久木田さん。「年

火の神保育園での「読み聞かせ会」の様子　①紙芝居をするプータンの会」の児玉菊代さん ②指遊びで園児をとりこにする「プータンの会」の久木田米子さん ③大型絵本を使った読み聞かせをする「たんぽぽのわたげ」の町元洋子さん（左）と山内美佐子さん（右）